

I 患者情報

1 総括及び全数把握対象疾患

- 一類～五類感染症
- 新型インフルエンザ等感染症
- 獣医師が届けを行う感染症

2 定点把握対象疾患

- (1) 内科・小児科・基幹定点把握対象疾患
- (2) 眼科定点把握対象疾患
- (3) 性感染症把握対象疾患

3 鹿児島県の風しん予防対策

- 鹿児島県の妊婦における抗体検査の調査事業

1 総括及び 全数把握対象疾患

- (1) 一類感染症
- (2) 二類感染症
- (3) 三類感染症
- (4) 四類感染症
- (5) 五類感染症
- (6) 新型インフルエンザ等感染症
- (7) 獣医師が届けを行う感染症

総括及び全数把握対象疾患に関する動向

鹿児島県感染症発生動向調査委員会委員長

鹿児島県医師会副会長

大西 浩之

【全数把握対象疾患の概要】

○一類感染症

発生報告はなかった。

○二類感染症

届出は結核のみで、191例の報告があった。前年の217例に比べ、26例少ない届出であった。病型では、肺結核(89例)、無症状病原体保有者(49例)、結核性胸膜炎(20例)の順に多く、年齢別では、80歳以上(81例)、70歳代(37例)、60歳代(21例)と、60歳以上が全体の約73%を占めている。

○三類感染症

細菌性赤痢1例、腸管出血性大腸菌感染症65例の報告があった。細菌性赤痢は2016年(1例)以降、8年ぶりの届出であった。腸管出血性大腸菌感染症は前年の126例より61例少ない届出であり、11月は鹿屋保健所管内でO-26による集団感染が確認されている。月別では8月(20例)、11月(13例)、6月(12例)の順に、血清型別ではO-157(19例)、O-26(13例)、O-111(10例)の順に多かった。年齢別では15～19・40～49歳(それぞれ8例)、2歳(7例)、30～39・60～69歳(それぞれ6例)の順に多く、保健所別では鹿児島市(21例)、鹿屋(18例)、始良(8例)からの報告が多かった。

○四類感染症

つつが虫病30例、レジオネラ症26例(前年比2倍増)、日本紅斑熱14例、重症熱性血小板減少症候群・A型肝炎それぞれ6例、レプトスピラ症4例、E型肝炎・デング熱それぞれ1例の報告があった。

つつが虫病は前年の45例より15例減少したものの、千葉県(50例)、宮崎県(34例)に次いで全国第3位の報告数であった。鹿児島県を含む南九州は、全国でも報告が多い地域であり、本県では例年11月から1月にかけて届出が増える傾向にあった。

一方、重症熱性血小板減少症候群(SFTS)は、前年(9例)を下回る報告数であったが、過去に飼育ネコやイヌの血液・糞便からSFTSウイルスが検出された事例や体調不良のネコに咬まれたヒトが発症・死亡した事例も確認されており、飼い主や獣医療従事者への二次感染防止にも注意が必要である。

また、つつが虫病や重症熱性血小板減少症候群（SFTS）はいずれもダニ類を介して感染する疾患であり、特に山間部・草地・藪などマダニ・ツツガムシが多く生息する環境での感染リスクが高いとされている。農作業・山菜採り・庭仕事・レジャー等で山林や畑に立ち入る際には、基本的な感染予防対策である長袖・長ズボン・手袋・長靴の着用等を徹底していただきたい。

○五類感染症

梅毒 129 例，劇症型溶血性レンサ球菌感染症 17 例，侵襲性肺炎球菌感染症 15 例，カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症 13 例，クロイツフェルト・ヤコブ病 10 例，百日咳 8 例，後天性免疫不全症候群 7 例，急性脳炎・侵襲性インフルエンザ菌感染症・アメーバ赤痢それぞれ 5 例，水痘（入院例に限る）4 例，播種性クリプトコックス症・ウイルス性肝炎（E 型・A 型を除く）・破傷風それぞれ 2 例，クリプトスポリジウム症 1 例の報告があった。

劇症型溶血性レンサ球菌感染症の報告数は、前年（5 例）の 3 倍近く増加した。本県だけでなく全国的にも増加傾向がみられ、2024 年における全国報告数は 1999 年の統計開始以降、過去最多であった。

○獣医師が届けを行う感染症の発生状況

結核のサル 8 例，鳥インフルエンザ（H5N1 亜型）鳥類の野鳥と家きん類 6 例の届出があった。

11 月には、出水市東干拓地及び出水市荒崎地区で回収された渡り鳥のヒドリガモ、ナベヅルの死骸から高病原性鳥インフルエンザウイルス（H5N1 亜型）が検出されている。また、5 例目に出水市、6 例目に霧島市の養鶏場で同鳥インフルエンザウイルスが検出され、鶏の殺処分、卵の移動制限等が実施された。

【総括】

令和 6 年（2024 年）の全数把握対象疾患の動向は、全体として大幅な増加は認められなかった。昨年比 2 倍以上の届出があったレジオネラ症・劇症型溶血性レンサ球菌感染症やその他の重症化リスクの高い疾患等に関しては、今後の動向を引き続き注視しつつ、医療機関や関係機関を通じて必要な感染対策の徹底を呼び掛けたい。

同年 3 月には、鹿児島県感染症予防計画が改定され、新型コロナウイルス感染症対応を踏まえた、医療提供体制の確保、人材の養成・資質向上、保健所の体制の確保に関する事項等が新たに追加され、感染症対策を機動的に講じられるよう、総合的かつ計画的に推進する方針が示されたところである。同予防計画上において、本感染症動向調査事業は感染対策の中心施策の一つとして位置付けられており、今後もより一層重要性が高まるものと予想される。

感染症を取り巻く状況は日々刻々と変化している中、鹿児島県環境保健センターをはじめ、行政、県医師会並びに関係機関が連携を図りながら、県民が安心して医療を受けられる体制構築に、全力で取り組んで参りたい。

最後に、本県における感染症発生動向調査事業の実施にあたり、指定届出機関をはじめとする関係各位の多大なるご尽力に深く感謝申し上げますとともに、今後とも一層のご支援とご協力をお願いしたい。

(1) 一類感染症の発生状況

発生報告なし

(2) 二類感染症の発生状況

令和6年の県内における二類感染症の届出は、結核が191例(男性89例、女性102例)で、令和5年の217例に比べ、26例少ない届出であった(表1-1-1、表1-1-2、図1-1)。病型では、肺結核(89例)、無症状病原体保有者(49例)、結核性胸膜炎(20例)の順に多く、年齢別では、80歳以上(81例)、70歳代(37例)、60歳代(21例)と、60歳以上が全体の約73%を占めている。

表1-1-1 月別発生状況

月	報告数	無症状病原体保有者(再掲)
1	19	4
2	18	5
3	11	1
4	13	3
5	16	2
6	15	3
7	18	4
8	15	5
9	12	5
10	12	1
11	24	9
12	18	7
合計	191	49

表1-1-2 保健所別届出状況

保健所名	報告数	無症状病原体保有者(再掲)
鹿児島市	80	22
指宿	6	0
加世田	7	2
伊集院	0	0
川薩	13	3
出水	6	1
大口	3	2
始良	28	7
志布志	1	1
鹿屋	21	5
西之表	2	1
屋久島	2	0
名瀬	15	3
徳之島	7	2
合計	191	49

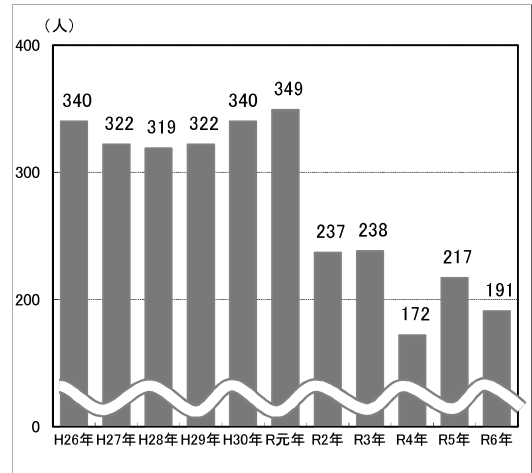


図1-1 平成26年～令和6年の結核発生状況

(3) 三類感染症の発生状況

令和6年の県内における三類感染症の発生状況は、細菌性赤痢1例(表1-2)、腸管出血性大腸菌感染症65例(図1-3-1、図1-3-2、図1-3-3、図1-3-4、表1-3-1、表1-3-2、表1-3-3)であった。

○ 細菌性赤痢

県内における細菌性赤痢の届出状況は、2016年1例から8年ぶりの1例(女性)であった。

表1-2 細菌性赤痢の発生状況(鹿児島県)

月	菌種	診断年月日	受理保健所	年齢	性別	特定感染地域	感染経路
4	<i>Shigella sonnei</i>	R6.4.15	鹿児島市	44	女	インド	経口感染

○ 腸管出血性大腸菌感染症

県内における腸管出血性大腸菌感染症の届出状況は、前年(126例)より61例少ない65例(患者35例、無症状病原体保有者30例)で、性別は男性19例、女性46例であった。11月には鹿屋保健所管内で026による集団感染事例の発生があった。月別では8月(20例)、11月(13例)、6月(12例)の順に(図1-3-1、図1-3-3)、血清型別では0157(19例)、026(13例)、0111(10例)の順に多かった(図1-3-2、図1-3-4、表1-3-1)。年齢別では、15～19歳・40～49歳(それぞれ8例)、2歳(7例)、30～39歳・60～69歳(それぞれ6例)の順に多く(表1-3-2)、保健所別では、鹿児島市(21例)、鹿屋(18例)、始良(8例)からの報告が多かった(表1-3-3)。

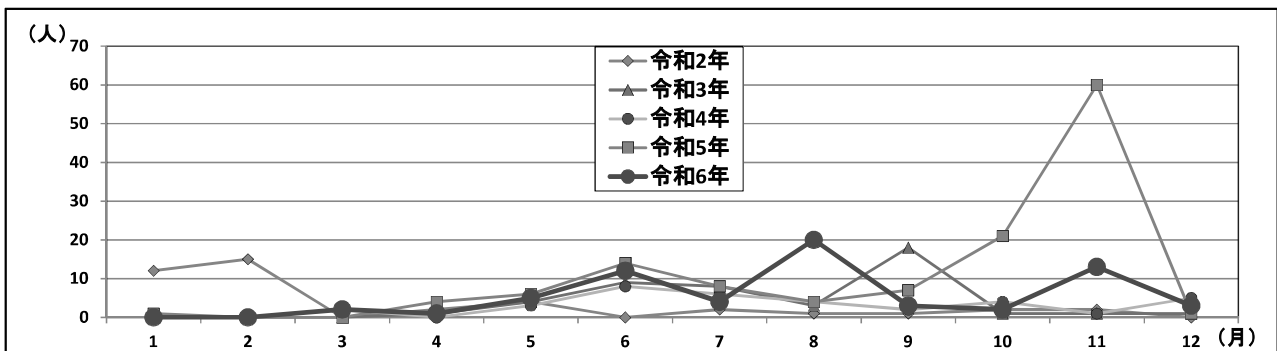


図1-3-1 腸管出血性大腸菌感染症の年別月別患者発生数

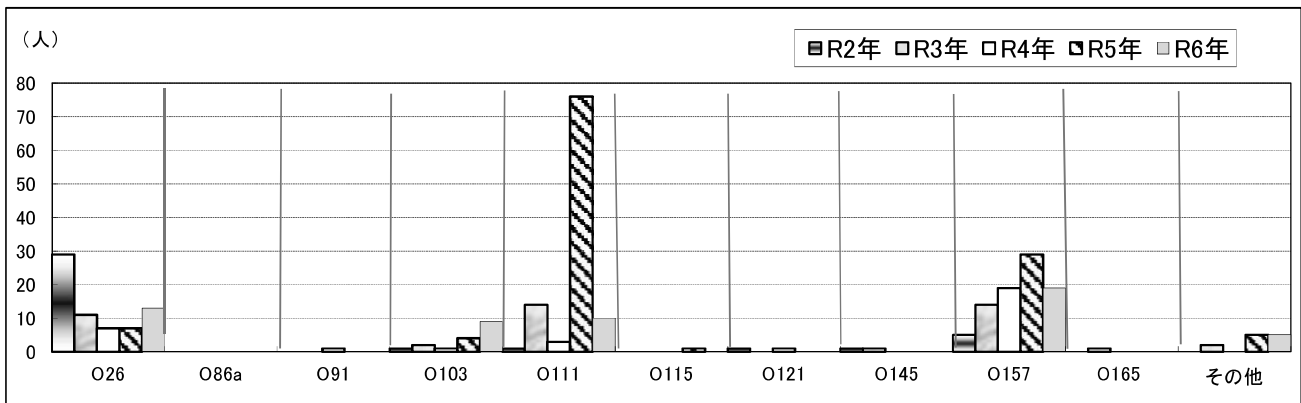


図1-3-2 腸管出血性大腸菌感染症の血清型別

表1-3-1 腸管出血性大腸菌感染症の年別血清型

年	型別	O26	O86a	O91	O103	O111	O115	O121	O145	O157	O165	その他	不明	合計
平成27年		12	0	0	1	6	1	2	0	20	0	2	5	49
平成28年		14	0	0	3	7	1	0	0	19	0	2	5	51
平成29年		21	1	0	2	14	0	1	1	11	0	0	6	57
平成30年		23	0	0	1	8	0	0	1	19	0	0	4	56
令和元年		20	0	0	5	2	1	4	0	13	0	4	5	54
令和2年		29	0	0	1	1	0	1	1	5	0	0	3	41
令和3年		11	0	0	2	14	0	0	1	14	1	2	1	46
令和4年		7	0	1	1	3	0	1	0	19	0	0	3	35
令和5年		7	0	0	4	76	1	0	0	29	0	5	4	126
令和6年		13	0	0	9	10	0	0	0	19	0	5	9	65
合計		157	1	1	29	141	4	9	4	168	1	20	45	580

表1-3-2 令和6年における腸管出血性大腸菌感染症の性別及び年齢別報告数

性別	年齢別	～1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10～14歳	15～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳	70歳以上	合計
男		1	3	1	0	0	1	0	0	0	1	4	2	1	2	0	2	1	19
女		2	4	1	3	2	1	1	0	0	3	4	2	5	6	4	4	4	46
合計		3	7	2	3	2	2	1	0	0	4	8	4	6	8	4	6	5	65

表1-3-3 令和6年における腸管出血性大腸菌感染症の保健所別報告数

保健所	鹿児島市	指宿	加世田	伊集院	川薩	出水	大口	始良	志布志	鹿屋	西之表	屋久島	名瀬	徳之島	合計
報告数	21	1	3	0	2	2	0	8	5	18	0	0	1	4	65

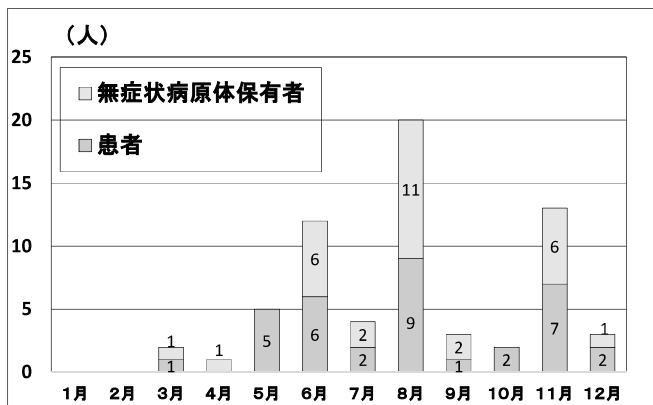


図1-3-3 令和6年における腸管出血性大腸菌感染症の月別・病型別報告数

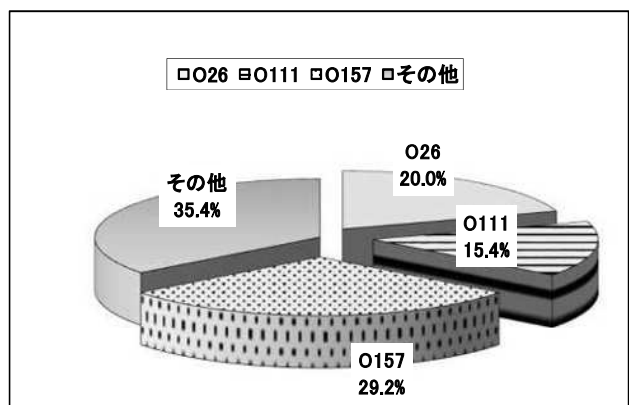


図1-3-4 令和6年における腸管出血性大腸菌感染症の血清型別割合

(4) 四類感染症の発生状況

令和6年の県内における四類感染症の届出は88例で、つつが虫病(30例)、レジオネラ症(26例)、日本紅斑熱(14例)、重症熱性血小板減少症候群・A型肝炎(それぞれ6例)、レプトスピラ症(4例)、E型肝炎・デング熱(それぞれ1例)であった(表1-4)。つつが虫病及び日本紅斑熱の年次別報告数推移を図1-4に示した。

表1-4 四類感染症の発生状況(届出数順)

疾患名	年									
	平成27	28	29	30	令和元	2	3	4	5	6
つつが虫病	67	77	66	89	66	92	82	76	45	30
レジオネラ症	4	19	7	8	17	16	13	27	13	26
日本紅斑熱	11	22	18	22	18	18	28	22	11	14
重症熱性血小板減少症候群(SFTS)	6	4	11	9	8	3	6	9	9	6
A型肝炎	1	1	1	1	2	3	3	4	1	6
レプトスピラ症	1	5	1	0	2	0	0	6	6	4
E型肝炎	0	1	0	3	0	2	3	2	4	1
デング熱	1	2	0	0	3	0	0	0	1	1
エムボックス	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0
Q熱	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
チクングニア熱	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
合計	91	131	104	132	118	134	135	146	92	88

○ つつが虫病

県内におけるつつが虫病的発生状況は、前年(45例)より15例少ない30例であった。全国の報告数(354例)のうち都道府県別では、全国第3位であった(1位千葉県(50例)、2位宮崎県(35例)、4位福島県(23例))。性別では、男性(17例)、女性(13例)で、月別では、1月(15例)、12月(9例)、2月(4例)の順に多かった。年齢別では、70歳代(12例)、60歳代(7例)、80歳以上(4例)の順に多く、届出受理保健所別では、鹿屋(7例)、志布志(6例)、鹿児島市(5例)の順であった。

○ 日本紅斑熱

県内における日本紅斑熱の発生状況は、前年(11例)より3例多い14例であった。性別では、男性が6例、女性が8例で、月別では、11月(6例)、5月・10月・12月(それぞれ2例)の順に多かった。年齢別では、70歳代(6例)、80歳代以上(4例)、60歳代(3例)の順に多く、届出受理保健所別では、鹿屋(13例)、鹿児島市(1例)の順であった。

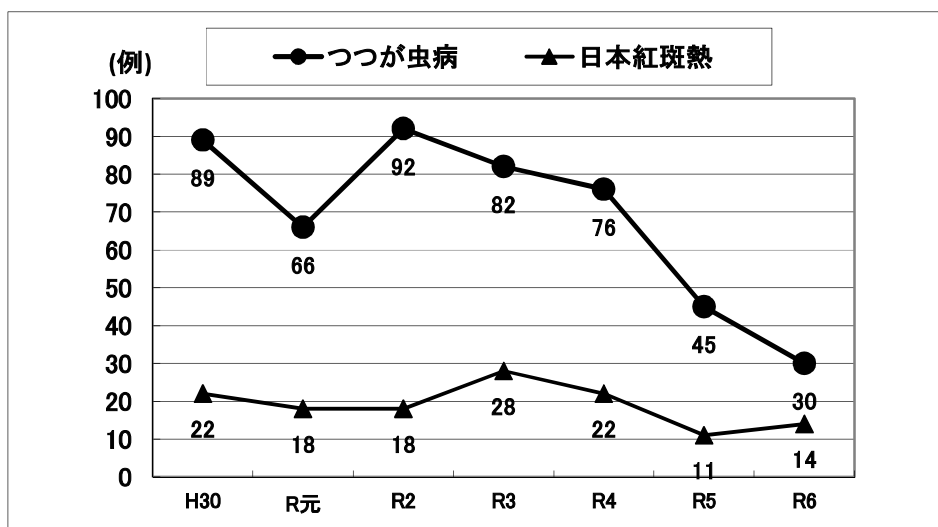


図1-4 つつが虫病及び日本紅斑熱の年別発生状況

○ レジオネラ症

県内における届出状況は、前年(13例)より13例多い26例(男性16例, 女性10例)であった。病型別では、肺炎型(24例), ポンティアック熱型(2例)であった。月別では、9月(6例), 1月・6月・7月・11月(それぞれ3例), 4月・5月・10月(それぞれ2例), 3月・12月(それぞれ1例)であった。年齢別では、80歳以上(14例), 50歳(4例), 30歳代・60歳代(それぞれ3例)の順に多かった。届出受理保健所別では、鹿児島市(11例), 出水・大口・始良(それぞれ3例), 指宿・徳之島(それぞれ2例)の順であった。

○ 重症熱性血小板減少症候群(SFTS)

県内における届出状況は、前年(9例)より3例少ない6例(男性3例, 女性3例)であった。月別では、4月(4例), 10月・11月(それぞれ1例)であった。年齢別では、60歳代・70歳代・80歳代以上(それぞれ2例)であった。

○ レプトスピラ症

県内における届出状況は、前年(6例)より2例少ない4例(男性3例, 女性1例)であった。月別では、1月・10月・11月・12月(それぞれ1例)であった。年齢別では、70歳代・80歳代以上(それぞれ2例)で、届出受理保健所別では、名瀬(3例), 鹿児島市(1例)の順であった。

○ A型肝炎

県内における届出状況は、前年(1例)より5例多い6例(男性4例, 女性2例)であった。月別では、5月(3例), 3月・6月・11月(それぞれ1例)であった。年齢別では、60歳代(2例), 20歳代・30歳代・50歳代・70歳代(それぞれ1例)で、届出受理保健所別では、西之表(2例), 伊集院・鹿屋・川薩・始良(それぞれ1例)の順であった。

○ E型肝炎

県内における届出状況は、前年(4例)より3例少ない1例(男性, 10月, 80歳以上, 鹿児島市保健所)であった。

○ デング熱

県内における届出状況は、前年(1例)と同数の1例(男性, 4月, 20歳代, 鹿児島市保健所)であった。

(5) 五類感染症の発生状況

令和6年の県内における五類感染症の報告は225例で、梅毒(129例)、劇症型溶血性レンサ球菌感染症(17例)、侵襲性肺炎球菌感染症(15例)、カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症(13例)、クロイツフェルト・ヤコブ病(10例)、百日咳(8例)、後天性免疫不全症候群(7例)、急性脳炎・侵襲性インフルエンザ菌感染症・アメーバ赤痢(それぞれ5例)、水痘(入院例に限る)(4例)、播種性クリプトコックス症・ウイルス性肝炎(E型・A型を除く)・破傷風(それぞれ2例)、クリプトスポリジウム症(1例)の届出があった(表1-5)。

表1-5 五類感染症の発生状況 (届出数順)

疾患名	年										
	平成27	28	29	30	令和元	2	3	4	5	6	
梅毒	9	18	21	51	55	38	56	141	164	129	
劇症型溶血性レンサ球菌感染症	6	3	3	3	7	11	9	4	5	17	
侵襲性肺炎球菌感染症	25	17	24	33	31	26	16	15	20	15	
カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	13	15	10	25	27	24	21	16	19	13	
クロイツフェルト・ヤコブ病	10	4	6	3	3	4	6	5	5	10	
百日咳				157	729	83	3	5	7	8	
後天性免疫不全症候群	9	11	18	8	13	12	6	13	7	7	
急性脳炎	11	17	21	26	29	14	18	19	11	5	
侵襲性インフルエンザ菌感染症	4	0	2	8	8	2	3	4	7	5	
アメーバ赤痢	7	7	7	7	6	5	2	4	5	5	
水痘(入院例に限る)	4	3	5	3	5	3	2	3	3	4	
播種性クリプトコックス症	1	1	5	1	2	3	2	4	2	2	
ウイルス性肝炎(E型・A型を除く)	4	6	4	5	3	2	2	4	1	2	
破傷風	5	4	5	8	5	4	3	4	1	2	
クリプトスポリジウム症	0	0	1	2	0	0	0	0	2	1	
ジアルジア症	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	
急性弛緩性麻痺				3	3	3	0	0	0	0	
風しん	0	1	0	3	2	1	0	0	0	0	
バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	
麻しん	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	
侵襲性髄膜炎菌感染症	0	1	1	2	0	0	0	0	0	0	
薬剤耐性アシネトバクター感染症	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	
合計	110	110	134	349	930	235	149	241	260	225	

○ 梅毒

県内における届出状況は、前年(164例)より35例少ない129例(男性78例、女性51例)であり、月別では4月(18例)、2月(16例)、1月・9月(それぞれ13例)の順に多かった。

病型別では、早期顕症Ⅰ期(63例)、早期顕症Ⅱ期(44例)、無症状病原体保有者(15例)、晩期顕症梅毒(6例)、先天性梅毒(1例)の順に、年齢別では20歳代(30例)、40歳代(26例)、30歳代(20例)の順に多く、届出受理保健所別では、鹿児島市(88例)、始良(13例)、鹿屋(6例)の順であった。

○ カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症

県内における届出状況は、前年(19例)より6例少ない13例(男性6例、女性7例)であり、月別では4月・8月・9月・11月(それぞれ2例)、2月・3月・5月・6月・10月(それぞれ1例)の順に多かった。年齢別では、80歳以上(7例)、70歳代(3例)、30歳・40歳・60歳(それぞれ1例)の順に多く、届出受理保健所別では、鹿児島市(11例)、始良・名瀬(それぞれ1例)の順であった。

○ 侵襲性肺炎球菌感染症

県内における届出状況は、前年(20例)より5例少ない15例(男性11例、女性4例)であり、月別では1月・3月・4月(それぞれ3例)、11月(2例)、2月・7月・8月・10月(それぞれ1例)の順に多かった。年齢別では80歳以上(6例)、70歳代(5例)、10歳未満(2例)の順に多く、届出受理保健所別では鹿児島市(11例)、出水・鹿屋・名瀬・徳之島(それぞれ1例)の順に多かった。

○ 急性脳炎

県内における届出状況は、前年(11例)より6例少ない5例(男性4例、女性1例)であり、月別では1月(2例)、2月・5月・8月(それぞれ1例)であった。年齢別では、10歳未満(4例)、60歳代(1例)の順に多く、届出受理保健所別では、鹿児島市(3例)、鹿屋(2例)の順であった。

○ 百日咳

県内における届出状況は、前年(7例)より1例多い8例(すべて女性)で、月別では7月・11月・12月(それぞれ2例)、4月・10月(それぞれ1例)の順に多かった。

年齢別では、10歳代(4例)、10歳代未満・50歳代(それぞれ2例)の順に多く、届出受理保健所別では、鹿児島市(7例)、徳之島(1例)の順であった。

○ 後天性免疫不全症候群

県内における届出状況は、前年(7例)と同数の7例(すべてが男性)で、月別では6月・10月(それぞれ2例)、4月・7月・8月(それぞれ1例)であった。

病型別では、AIDS 4例、無症候性キャリア 3例であった。年齢別では、40歳代(3例)、30歳代(2例)、20歳代・50歳代(それぞれ1例)の順に多く、届出受理保健所別では、鹿児島市(4例)、始良(2例)、志布志(1例)の順であった。

○ 侵襲性インフルエンザ感染症

県内における届出状況は、前年(7例)より2例少ない5例(男性1例、女性4例)で、月別では4月(2例)、3月・8月・9月(それぞれ1例)であった。年齢別では80歳以上(3例)、50歳・70歳代(それぞれ1例)の順に多く、届出受理保健所別では、鹿児島市(2例)、出水・始良・鹿屋(それぞれ1例)であった。

○ 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

県内における届出状況は、前年(6例)より11例多い17例(男性11例、女性6例)で、月別では1月・4月(それぞれ3例)、2月・5月・6月(それぞれ2例)、3月・7月・8月・9月・10月(それぞれ1例)であった。年齢別では50歳代・80歳以上(それぞれ5例)、70歳代(4例)、30歳代(2例)、60歳代(1例)の順に多く、届出受理保健所別では、鹿児島市(14例)、鹿屋・名瀬・西之表(それぞれ1例)であった。

○ クロイツフェルト・ヤコブ病

県内における届出状況は、前年(5例)より5例多い10例(男性3例、女性7例)で、月別では10月・12月(それぞれ2例)、1月・2月・3月・6月・7月・8月(それぞれ1例)であった。年齢別では80歳代以上(6例)、70歳代(3例)、60歳代(1例)の順に多く、届出受理保健所別では、鹿児島市(7例)、始良(2例)、指宿(1例)であった。

○ アメーバ赤痢

県内における届出状況は、前年(4例)より1例多い5例(すべて男性)で、月別では5月・7月・9月・10月・11月(それぞれ1例)であった。年齢別では40歳代・50歳代(それぞれ2例)、60歳代(1例)の順に多く、届出受理保健所別ではすべてが鹿児島市であった。

○ 水痘(入院例に限る)

県内における届出状況は、前年(3例)より1例多い4例(すべてが男性)で、月別では3月・7月・10月・11月(それぞれ1例)であった。年齢別では30歳代(2例)、20歳代・70歳代(それぞれ1例)の順に多く、届出受理保健所別では、鹿児島市(3例)、始良(1例)であった。

○ 播種性クリプトコックス症

県内における届出状況は、前年(2例)と同数の2例(すべてが女性)で、月別では2月・9月(それぞれ1例)であった。年齢別では70歳代(2例)で、届出受理保健所別では、すべてが鹿児島市であった。

○ クリプトスポリジウム症

県内における届出状況は、前年(2例)より1例少ない1例(男性、4月、40歳代、川薩保健所)であった。

○ ウイルス性肝炎(E型, A型を除く)

県内における届出状況は、前年(1例)より1例多い2例(男性1例, 女性1例)で、月別では5月(2例)であった。年齢別では、10歳代, 30歳代(それぞれ1例)で、届出受理保健所別では、すべてが出水保健所からであった。

○ 破傷風

県内における届出状況は、前年(1例)より1例多い2例(男性1例, 女性1例)で、月別では8月・12月(それぞれ1例)であった。年齢別では70歳代・80歳代以上(それぞれ1例)で、届出受理保健所別ではすべてが鹿児島市保健所であった。

(6) 獣医師が届けを行う感染症の発生状況

結核のサル8例（表1-6-1）、鳥インフルエンザ（H5N1亜型）鳥類の野鳥と家きん類6例（表1-6-2）の届出があった。

鳥インフルエンザ（H5N1亜型）については、出水市東干拓地及び出水市荒崎地区で第47週（11/20、11/22）に回収した渡り鳥のヒドリガモ、ナベツルの死骸から高病原性鳥インフルエンザウイルス（H5N1亜型）が検出された。また、5例目に出水市、6例目に霧島市の養鶏場で鳥インフルエンザウイルス（H5N1亜型）が確認され、鶏の殺処分、卵の移動制限等が行われた。

表1-6-1 本県における結核サルの届出状況（令和6年）

	発生場所	報告日	動物名	診断週
1例目	指宿市	1/19	カニクイザル	3週
2例目	指宿市	2/27	カニクイザル	9週
3例目	指宿市	3/8	カニクイザル	10週
4例目	指宿市	4/30	カニクイザル	18週
5例目	指宿市	5/27	カニクイザル	22週
6例目	指宿市	8/23	カニクイザル	34週
7例目	指宿市	9/20	カニクイザル	38週
8例目	指宿市	10/4	カニクイザル	40週

表1-6-2 本県における高病原性鳥インフルエンザ届出状況（令和6年）

	発生場所	報告日	動物名	診断週
1例目	出水市	11/20	ヒドリガモ	47週
2例目	出水市	11/20	ナベツル	47週
3例目	出水市	11/20	ナベツル	47週
4例目	出水市	11/22	ナベツル	47週
5例目	出水市	11/25	家禽(ボリスブラウン)	47週
6例目	霧島市	11/26	家禽(チャンキー)	51週

表1-6-3 本県における高病原性鳥インフルエンザ家禽届出状況と防疫措置状況（令和6年）

	発生場所	通報日	飼養羽数	ウイルス型	殺処分完了日	防疫措置完了日
5例目	出水市	11/19	採卵鶏 約11.3万羽	H5N1	11/22	11/25
6例目	霧島市	12/19	肉用鶏 約9万羽	H5N1	12/21	12/23

（鹿児島県ホームページより）